

平成25年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
(特別支援学校と小・中学校との交流及び共同学習の推進)」報告書

団体名	新潟県教育委員会
研究開始年度	平成24年度

I 概要

1 指定校の一覧

特別支援学校		交流及び共同学習の 相手先となる小・中学校	
設置者	学校名（ふりがなを付すこと）	設置者	学校名（ふりがなを付すこと）
新潟県	にいがたけんりつにいがたまうがっこう 新潟県立新潟盲学校	新潟市	にいがたしりつさくらがおかしやうがっこう 新潟市立桜が丘小学校
		新潟市	にいがたしりつにいつだいきんしやうがっこう 新潟市立新津第三小学校
		新潟市	にいがたしりつやまがたちやうがっこう 新潟市立山潟中学校

2 研究テーマ

地域で絆を深め合うことを目指した特別支援学校と居住地校、近隣校との交流及び共同学習の在り方を考える。

3 研究の概要

(研究内容)

- (1) 児童生徒の学力の充実を図るための交流及び共同学習の在り方の検討
- (2) 近隣校との学校間交流における交流及び共同学習の充実
- (3) Web会議システムを活用しての交流及び共同学習の充実
- (4) 「交流」と「共同学習」の両方の側面を大切に交流及び共同学習の推進

(評価の観点及び評価方法)

- ・両校の担任が、「個別の指導計画」「学校間交流振り返りシート」「居住地校交流概況記録」に基づき、6観点5段階で児童生徒のねらいや達成度を評価する。
- ・授業分析において、交流及び共同学習の目標設定、支援について評価するとともに、合理的配慮の在り方について検討する。
- ・アンケートを実施し、児童生徒、保護者、小・中学校教員の障害児理解に関する意識・態度等の変化を評価する。
- ・研究運営会議を開催し、外部の有識者から評価を受ける。

4 研究成果の概要

成果と課題（○成果 ▼課題）

(1) 児童生徒の学力の充実を図るための交流及び共同学習の在り方の検討について

- 交流及び共同学習では、集団での学び合いによる学習効果が顕著であった。国語、音楽・道徳において、好ましい実践が多く見られた。
- 特別支援学校（視覚障害）の年間指導計画に交流及び共同学習で実施可能な単元や題材を明記し、育てたい力を個別の指導計画に反映させたことで、小・中学校担任との事前の話し合いが深まり、学習活動が充実した。
- 「居住地校交流概況記録」を両校の担任が共同で作成し、計画・実施・評価を行うことで、交流校担任の特別支援学校（視覚障害）児童への理解が深まり、交流及び共同学習のねらいがより明確になり、合理的配慮の充実にもつながった。
- 両校の担任が連携して、特別支援学校（視覚障害）児童に対して必要な合理的配慮を提供したことにより、小学校の児童の「聞く・話す」力が向上し、学級内の学習規律も整った。
- 交流校担任と密接に連絡を取り合い、特別支援学校（視覚障害）で事前学習を行うことにより、見通しをもって主体的に学習することができた。
- ▼理科や算数・数学においては、視覚に訴える事象を、別の感覚に変換して説明する必要性が、他教科に比べ圧倒的に高い。そのため、交流及び共同学習では、学習スピードや学習量を合わせる事が難しく、困難が多かった。

▼遠方の居住地校交流での支援体制について工夫・改善が必要である。

(2) 近隣校との学校間交流における交流及び共同学習の充実について

- 年間を通して固定の活動ペアを作り、活動することで、親しみが増し、互いを気遣う姿が見られた。
- 教科・領域での交流及び共同学習を実施し、居住地校が遠方にある児童生徒にとっては集団で学習する機会を保障することができた。
- ▼特別支援学校（視覚障害）の児童生徒に自己認識や援助依頼の力を育てることが必要である。
- ▼障害の重度化・多様化に対応し、活動内容やグループ分け等を更に工夫・改善する必要がある。

(3) Web会議システムを活用しての交流及び共同学習について

- 事前学習や授業で活用することで、交流及び共同学習の機会が充実した。
- 教員間の打合せや、評価においても活用できることが検証された。
- ▼視覚的な情報に替わるコミュニケーションの取り方を事前に十分確認する必要がある。
- ▼Web会議システムでの授業交流時に、特別支援学校（視覚障害）職員が居住地校を訪問し、より良い活動の仕方を検討したい。
- ▼居住地校交流に担任が引率できない場合の支援や評価での具体的な活用法を確立する。

(4) 「交流」と「共同学習」の両方の側面を大切にされた交流及び共同学習の推進について

- 特別支援学校（視覚障害）と小・中学校の担任が連携して活動内容を工夫し、互いの児童生徒のことを説明したり、関わり方のモデルを示したりしながら継続して活動することで、児童生徒は良さを認め合い、相互理解が深まった。

- 両校の児童生徒は友達が増えたことを喜び、次に会うことを楽しみにしていた。
- 小・中学校の児童生徒は視覚障害をごく自然に受け止め、必要な場面でのみ手を差し伸べるようになった。身の回りの点字や点字ブロックへの関心が高まった。
- 居住地校の児童が特別支援学校（視覚障害）を訪問するなど、交流及び共同学習に広がりが見られた。
- ▼「全校児童との交流を深めたい」という居住地校の提言を活動に反映させたい。